

記念講演 経済・社会科学賞
コーネル大学政治学部名誉教授 ベネディクト・アンダーソン 氏

アジアコスモポリタン賞を受賞できたことは私にとってとても喜ばしいことです。

私はアイルランド市民です。1936年、中国で、アイルランド人の父と英国人の母の間に私は生まれました。最初に中国で教育を受け、アメリカ、アイルランド、英国で、私は四つの違ったタイプの教育を経験したのです。

1940年代から1950年代に私は様々な言語を学び、素晴らしい文学に接する機会がありました。幸運にも父がたくさんの本を残してくれ、私は10代のころに『源氏物語』や『枕草子』等を読みました。私は言語を、次に文学を好きになりました。

1950年ごろ、現在の天皇陛下が皇太子殿下のころ、英国の青少年に対する教育を視察に来られました。そのとき私は、殿下も私たちと同じティーンエイジャーで、同じように緊張もするし、若者らしいミスもするのだと分かり、共感を覚えました。私は、人生においてこのような機会に恵まれたことに深く感謝しています。

1962年、私はインドネシアを研究することになりました。インドネシアの市民が日本の軍歌を歌っていたことに私は強い印象を受けました。歌詞は多少変わっているようですが、インドネシアでずっと歌われてきたのです。

もう一つ私が驚いたのは、兄弟の関係についてです。欧米における兄弟は競争関係にあり、あまり心地よい関係ではないのですが、インドネシアでは、年長者が年少者の面倒を見ます。十二、三歳の男の子達が小さい子達の面倒を見ながらサッカーを

している姿はとても印象深いものでした。

私はインドネシアから1972年に追放され、以後27年間戻ることができませんでした。このとき自分がどれほどインドネシアを愛しているか認識しました。

スハルト独裁政権時代の1980年に一度戻ったとき、ジャカルタの空港に着いたとたんに私は秘密警察に逮捕され、すぐ次の便で出国するという不快な経験をしました。

そのときの飛行機の中で、私は大変な苦痛を感じました。この痛みは空港で逮捕されたことによる心の痛みからくるもので、バンコクに着いた途端、全部消えてしまいました。

この経験は、私にとって大きな学びであり、これによりナショナリズムに関する私の考え方が変わりました。私はこの経験を基に『想像の共同体』を書き上げたのです。

その後、私はタイで研究していました。タイのクーデターやインドネシアのスハルト軍による東ティモールの暴力的な併合があったとき、私はタイ研究の専門家、国連や議会に抵抗運動への賛同と署名を求めましたが誰も署名してくれませんでした。こうした人たちは、私はコスモポリタンではないと考えます。

イギリスには、「痛みを乗り越えたカキにしか真珠はつくれない」ということわざがあります。友人や国などに対する愛着からくる痛み、それら愛するものとの別れに対する痛みを乗り越えた人こそが、私は真のコスモポリタンであると考えます。

